

ハリエット・マーティノーウの経済思想 (2)

[翻訳] 暴徒・不景気な時代の物語 (下)

(*Rioters; or A Tale of Bad Times*. 1827. Wellington, Salop: printed by and for Houlston and son, London.)

船 木 恵 子

[Summary]

This is a translation of the second half of Harriet Martineau's *Rioters; Or, A Tale of Bad Times*. An outline of the story is provided up to the previous section (the first part of the story), which mainly focuses on Martineau's machinery theory. This is the political point at issue in this age, and I claim that it was the origin of Martineau's economic thought.

On the other hand, the trial of Brett's two sons, who destroy factory windows during a riot and are arrested, is the main theme of the second half of the story. Here, Martineau's views on law are strongly asserted. Finally, Martineau explains the importance of observing the law through the trial and a long historical text. Why is observance of the law required? She illustrates this through the words of the narrator. Although the narrator's social class differs from Brett's, he behaves as a friend to Brett and his wife Mary. The narrator works toward getting the sentences imposed on Brett's sons commuted. He goes to Lancashire expressly to see Brett's sons' trial, and he consoles and encourages Brett, who has walked from Manchester for the trial. His attitude isn't one of charity to the working class, but that of a friend. This attitude frames Martineau's subsequent writings. Although *Rioters* is an early work for Martineau, lots of her ideas are included, and it's important for understanding her thought.

1. 前編のあらすじ

ロンドンで商売を営む主人公の「私」は、商用でマンチェスターへやってきた。彼は定期的にごの町に来ている。今回マンチェスターの町に入ると、町の様子はいつもと全く違っていった。この時、町は機械打ちこわしの労働者たちであふれていた。暴動の様子を見に行った「私」は労働者住宅の前で赤ちゃんを抱えて途方に暮れる労働者の妻メアリーに会った。聞けば夫と息子二人が暴動に加わっているという。家には火の気も食料もなく、3月とはいえ、とても寒かったので、「私」

は二人の命を救うために、近くの家の女性に二人の世話を依頼し、さらに暴動の様子を見に行った。工場を襲撃する暴徒の集団を遠くで観察していると、ひ弱で全く暴力とは程遠い兄弟が騎馬兵にとらえられるのを見た。また、よく観察すると暴徒といっても、一部の扇動家に動かされている労働者の様子が理解できた。翌日メアリーと赤ちゃんの様子を見に行くと夫のブレット氏が暴動から戻ってきているのを見て、「私」は彼と議論をする。ブレット氏は堅実な手織機職人で、息子2人も職人として自分が仕込んだという。しかし工場が機械を導入したので三人とも失業したという。主人公の「私」とブレット氏は、機械が労働者の職を永久に奪うのか、それとも機械の生産力は急激に生産量を増加させるので、今は一時的に供給過剰になっているだけで、いずれは景気が回復して、再雇用されるのかどうかを話し合う。「私」は現在は一時的な供給過剰だから、景気は必ず元に戻るはずだと主張する。ただし、機械の技術革新は国際的な市場競争のために継続すべきなので、手織機工は手織機の仕事ではなく、動力織機工として、あるいは、もっと別の職業に再雇用されるだろうと主張する。機械を全部破壊すれば、失業した労働者の再雇用が実現できると考えていたブレット氏は「私」との議論で考え方を変化させる。ブレット氏は暴動をやめようと皆に訴えようとするが、すでに二人の息子が当局にとらえられてしまった。「私」は彼らの娘がマンチェスター郊外のメアリーの父のところで養育されていることを知って、なんとかこの一家の窮状を助けられないか、メアリーの父と相談しようと彼を訪ねることにした。

父の家を訪ねた「私」は、メアリーの父に会う前に、家事をしっかりとこなし、礼儀正しいブレット家の長女のハンナに会った。彼女は手織機工になった女性たちが、職を失って他になんの技術も、家事能力すら持っていないので、今、生活苦になっていることを話した。彼女たちは手織機工の賃金がよかったので、家事をすべて外注していたが、解雇されると家事ができないので生活すべてが困難になっているという。しかし、ハンナ自身は、どんな局面になっても通用するように母のメアリーからたくさんの技術を教えられており、特に編み物の腕前はとでも優れていた。それを聞いた「私」はメアリーに靴下を編む仕事を依頼することになる。父にはマンチェスターへ行き、畑でとれた野菜の行商をすることを勧める。いくらかでも失業した一家が救貧院へ行かなくても済むような生活費の援助をするため考えたことだった。行商に行く老人に「私」は付き添ってマンチェスターへ戻ることにした。

2. [翻訳] 暴徒・不景気な時代の物語（後半 67 頁～ 122 頁）

老人は、ハンナに自分がいない間しっかりと家を守り、家の戸締りをして、もし自分が夜の7時よりも前に戻らなかったなら、朝まで戻らないことを伝えた。我々がドアから出て振り返ると、彼女は私に丁寧に挨拶をした。

「彼女はほんとうに良い子ですね。」と私は言った。

「そうです、その通りです。」と老人は答え、「ハンナは私が知る限り、実によく働き、穏やかで、器用な子です。私がまだ働ける間は、なんとか面倒を見てやろうと思っています。ここで守り、幸せで、何の不自由もなく暮らさせてあげたい。私にとって、それはなによりも幸せなことです。私

は彼女の兄弟が、ハンナと同じように誘惑から逃れることができたならよかったのと思います。孫息子はこうした問題が起きる前は、良い子たちだった。だが、今では変わってしまったのでしょうね。ほかの人たちと同じように。」

「私もそう思いますよ。」と答えた。そして、「貧しい人々は法律に対する抵抗罪について気がついていない。もしこうした暴動で誰かが絞首刑になったとしたら、彼らはおそらくその人物を英雄として持ち上げるでしょうね。それに法律がどれほど残虐なものであるかを訴えてくるでしょう。もしかしたら治安判事を訴えるかもしれない。致命的な間違いは、彼らに全く知識が不足していることなんです。例えば、あなたの孫たちは政府に対する重大な犯罪に関係したときに、自分たちが迫害されたと思って、自身の権利の主張ばかりしているように思えるんだが。」と述べた。

「旦那、孫たちはだまされたんですよ。仲間を信じたんです。孫たちは若くて、それに性急だから、きっと自分たちが何をしたのか考えていなかったんですよ。」

「そこなんだ。」と私は答えた。「私がたまたま暴動で見た暴徒の若者はほとんど窓や器物の破壊という方法をよく知らないようだった。だが、私が残念でならないのは、そんな若者たちがまるで暴動を素晴らしいことのように思うことなんです。そう思うべきじゃないのに。そして犯罪の処罰としてあとでそのつけが必ず回ってくるはずなのに。」と述べた。

「彼らが自暴自棄になって、間違ったことに凝り固まっているあいだは、人の言うことなんぞ、聞く耳持たないでしょう。」と老人は言った。

「それはわかっています。」と私、

「だからもっと悲劇的なんですね。戦争がなくて繁栄している時代には、政府は若者たちが法に従っていくように注意深く導かなくてはならない。それは政府の重要な義務なんだ。なんでもうまくいっている限りは、ほとんど暴動を起こそうなんて考えやしないからね。だが生活が苦しくなると、彼らは短絡的に上役を責めたてる。何も考えずにしばしば殺人を犯すような暴動に向かっていくんだ。もし彼に罰が下ったら、自分たちの犯した罪よりも、自分たちの受けた損害ばかり見ようとする。私は、貧しい暮らしをしているからといって、法律に従うだけで、法律にかかわらなくていいなんて考えちゃだめだと思います。むしろすべての人々に、誰が法律を作るか、法律がなぜ作られるか、そして誰のために作られるかってことを知ってほしいのです。そうすれば、おのずと法は、それに従うすべての人々の利益になることがはっきりとわかるでしょうからね。」

「確かにそうですが、それをどうやって理解させたいのでしょうかね。」と老人。

「私の意見としては、些細なことだが、人々にこの時代を直視してほしいと思うのです。少なくとも私の子供たちには見てほしい。この国の子供たちが、私の子どもたちとおなじように、この時代のこんなひどい状況を知れば、それは容易に理解されるんじゃないだろうか。我々はこんな恐ろしい、暴力の現場をこれ以上見るべきじゃないんだ。」

通りすがりに二人の女性を追い越したとき、老人は彼女たちに挨拶をした。二人は母親と娘のようだった。とても貧しい身なりだったが、それでもきちんと立派だった。

「お疲れのようですね。家路を急いでいるのですか？」と老人（70頁）。

「はいそうです。母をほんの少し荷車に乗せてもらえたらうれしいのですが。母はとても疲れてしまってます。」と娘が答えた。

「さあ、どうぞ。二人とも乗れますよ。家まで送りましょう。私たちはあなた方の家を通り過ぎていきますから。」と老人は言った。そして私に、

「ほんの少し、お待たせすることになってすみません。でも、よろしければ、そのまま馬に乗って先に進み続けてください。」と言った。

しかし私は、あえて老人の荷車の横を進むことにした。私は可能な限り多くの人々の生活困窮の状態を知りたかったので、なるべく会話を聞くチャンスを失わないようにしたのだ。

「最近どうかね？」と老人。

「良くないけど、だんだん良くなると思うわ。」と母親が言った。

「どんな風にかい？ここでは仕事がないかね。」と老人。

「ないわ。でもウィリアムは巡査になるの。彼は高給をもらうはずよ。」

「ジェニーはベンスレー夫人のところへ、週に1回、洗濯をしに行くはずだわ。だから彼女は週に一回よい食事が食べられるわ。そのほかにも最近ではまあ、仕事はないわけじゃないわ。」

「ウィリアムはどうやって任命されたのかい？誰が彼を推薦したの？」

「一番いい方法よ。彼は自分で推薦したの。」と母親。

「貧しい人たちを興奮させて、つぎつぎに暴動を起こすように持ちかける悪い奴らの一人が、道でウィリアムに話しかけてきたそうよ。奴はしつこく説得してきたの。親方のひどい仕事の強制について彼に話したわ。それで、もしすべての織機が破壊されたなら、よい時代が来るはずだといったそうよ。けれどもウィリアムはそれより、もっといろいろなことを良く知っていたので、絞首台に行くような法律破りをするつもりは毛頭なかったのよ。その男はもっと近寄ってきて、今度は工場を襲って金がある会計室をこじ開けて、金を分けようとささやいてきたそうよ。もし一緒に行くならポケットに入れても誰にも分らないはずだと言ったそうよ。でも私の息子はすぐに彼から逃がれて、『このならずもの！』と大声でさげんだそうよ。『あんたは我々の心も体もダメにして、その苦しみを利用しているんだ。でもあんたは僕を引き入れることはできないよ。暴動をおこして、貧しい人々を絞首台に送るのはあんたのような人間なんだって僕は言えるさ』って大声で怒鳴ったそうよ。

まあ、たぶん私は、息子は腹を立てていたとは思うけど、わざと大きい声を出したんだと思うのよ。その時近くを通り過ぎる紳士が、ウィリアムをだまそうとした男を捕まえてくれるようにね。でもその悪い男は姿を消してしまったそうよ。そしたらその紳士はウィリアムに一部始終を話させたの。そして警察署に自分と一緒に行くように命じたそうよ。息子は同行して、その紳士はそこにいた2、3人の警官にその話をしたそうよ。そしたら彼らがウィリアムに巡査になりたいかと尋ねてくれたの。息子はもちろんとっても喜んだわ。そこで彼らはウィリアムにその場で宣誓をさせたというわけなの。」と母親は言った。

「そうか。ウィリアムのやったことは申し分ないなあ。うちの孫たちもウィリアムのようなようだったらよかったのだがね。あんたの知り合いに私の孫たちのことを何か聞いていないかね？」と老人は言った。

「ああ、そうだわ。ウィリアムは悲しいことに彼らを拘置所に連れて行くのを手伝わなければならなかったそうよ。」

「教えてくれないか。詳しく聞いていないのだよ」と老人。

「それがどんな具合だったとか、確証があるかどうかとか、暴徒だったのか、それとも彼らが本当に暴力をふるっていたかどうかにかかわらず、ただ捕えられただけだったのかとかね。」

「私は知っているわ」と母親。

「ジョージがMr.一氏の工場の窓に無理やり入ろうとしていたこと。工場で兵士たちがジョージをとらえたとき、弟のジョンが兄さんを兵士から引き離そうとしたのよ。」

私はこれを聞いたとき、前日の夜の暴動で、ずっと見ていたあの青年たちが、ブレット家の息子たちだったことを始めて知ったのだ。そして私が前から感じていた息子たちへの関心は今、また膨らんできたのだった。

我々がマンチェスターの町中につくと、私は老人と別れた、そして急いで宿へ向かった。遅くなってしまったので、私は知人の紳士と約束していた夕食会のために正装する時間がほとんどなかった。この紳士はこの町の工場主だ。だから私はパーティーの会話のゆくえをだいたい予想していた。私が予想した通り、この町の今の混乱状態は会話の中心だった。婦人たちは皆、次はうちの工場に暴徒が来るのではないかという大きな恐れを抱いていた。けれども平然としている私の友人は、今朝まで彼自身が暴徒の中において、彼の妻と娘たちに危険がなかったことを皆に保証していた。

ディナーがはじまる直前に、使用人が所々汚れて、たどたどしい筆跡の手紙を彼の手へ委ねた。彼はそれをひっくり返すと、それを読むために窓際の隅の目立たないところへ行った。彼の妻がその態度をみて、何が書かれているのか不安に思っているのを、彼は気に留めなかった。私はすぐに察して、彼に話そうとしたけれども、彼はしばしば席をはずし、不安げに見えた。ついに、彼は行動をおこした。彼の息子の1人を部屋に呼んだのだ。彼が戻ったとき、使用人が我々を食堂に呼び寄せるために後に続いた。彼の妻は何かためらっているようにみえた。その時、「ヘンリーを待つことはありません。彼はすぐにご一緒しますから。」と彼は皆に言った。(75頁)

「なんだか変ね。どうしたのかしら？」どこかの婦人が言うのが聞こえた。「あの手紙になにか特別なことが書いてあるはずだ。」と私は言った。

「ご婦人たちを緊張させるような、あの最悪の事態だ。」と私の友人が言った。

「きっとあの手紙に答えるためにヘンリーをやったんだろう。私の妻がそれを察しておびえて震えている。」

しかしそうはいつでもディナーは賑やかなものだった。主人は会話をし続けて疲れるほどだっ

た。主人は実に立派なふるまいだった。ただ我々は何か大きな出来事がおきるのを期待しつつ座っているかのように感じた。私は1、2度、主人が道路から聞こえた騒音にびくっとして、無意識に彼の頭を窓に向けるのを観察した。これは不可解な手紙が暴徒からのものではないかという、何か虫の知らせのような疑いを確固とさせた。ヘンリーはすぐ戻ってきて部屋に入った。彼の父は彼を見るとすぐに問いかけ、そしてうなずいて答えた。

いつものように夕食の後、女主人は部屋を離れるために立ち上がった。そのとき、耳慣れた、恐ろしい叫び声が聞こえた。それはまだ遠かったが、皆にもその声が聞こえた。いったん立ち上がった婦人たちは再び椅子に沈みこんだ。

「怖がらなくていい。」と主人が叫んだ。

「軍隊を呼ぼうか」と私は問いかけた。

「万事整っている」と主人は答えた。

「すべて十分に安全なはずです。応接室へ行ってごらんください。恐れることはない。最悪でも奴らは工場を襲撃するはずだ。とにかく工場も、家も安全なはずだ。みなさん保障しますから。大丈夫です。」

またさらに大きな叫び声が聞こえた。暴徒は近くにいるようだった。ヘンリーが急いで階段を駆け上り、屋根裏の窓から通りを見て「奴らは女と子どもばかりだ。いつもの暴徒とは違う。」と言った。するとヘンリーは「あっ、軍隊がきた!」と喜びの声をあげた。(77頁)

すると馬が蹄の音を立てて、近づき、速やかに暴徒を散らし、軍隊の一部はこの家を守るためにとどまった。とりあえずの危険は去ったのだ。私は婦人たちがこの不安から解放されるまでそこにとどまった。私はブレット家の人たちを訪問するという約束をしていたのだが、9時以降の外出禁止令が出ているのを知っていたから、とりあえず今日は行かずに休むことにした。しかしメアリー・ブレットが靴下の製作にどのぐらい時間がかかるのか、その支払いをどうしようかと考え、(今は3カ月後、再びマンチェスターに来ることを予想できない) 私はこの家の女主人に、メアリー・ブレットの仕事を受けとり、確認して二足分を支払ってくれるようお願いした。すると親切にも彼女は快く引き受けてくれた。

私は彼女がもう頼まれた仕事をしていることを知っていた。彼女の夫は、私の到着を予想して、彼女と一緒にいた。メアリーの父親も彼が望んだように、およそ1時間で仕事を終えて戻った。私は涙ぐんでばかりいたメアリーのうっ積したつらい感情に風穴があいたような感じがしてとりあえずよかったと思った。

「もう仕事をしているのかい、メアリー!」と私は叫んだ。

「あなたがもう一度収入を得る喜びを感じられるといいと思っているんだ。」と私。

「ありがとうございます。あなたに神のご加護を! これほどの的を射た支援はありません。

何か働くことがあるということは慰めです。」とメアリー。

「我々は、今、どんどんこうしたことをすべきだし、できると期待しているんだよ。」

「今はただ、二人の囚われの息子とこの赤ん坊を養うことだけを考えています。」と彼女は言って深くため息をついた。

「メアリー、我々にはどうしようもないよ。」と彼女の夫が言った。

「多分私はまもなく1つ2つの片手間の仕事を得るかもしれません。少しは稼げるでしょう。それにジャガイモもある。またいくらかのシリングもある。以前のように何もなかったときよりも望みがわいてきましたよ。」とブレット氏は言った。

私は、彼らの娘ハンナを大いに賞賛した。そして貧しい彼らにわずかばかりの薄光が差し込んだことを見届けて私は満足した。この二人は二日前に初めて会ったとき私を責めるような荒々しい話し方をした同じ人と思えないような、丁寧で優しく、そして謝意を持って接してくれた。

「つい先日の夜、私はあなたの二人の息子たちを見たとき、警察は彼らに罰金を科していた。だが私は長いことその状況を見ていたのだが、その時私はそれがあなた方の息子たちとは知らなかったんだよ。」と私は話を切り出した。

「あなたは私の息子たちを知らないでしょう？」と心配して母親は叫んだ。

「たしかに知らないが、証拠が十分にある。」と私は答えた。(80頁)

「私は決して公の公正を妨げるつもりはないが、公に対しての差しさわりがないのなら、君の息子たちの罪の軽減に貢献することに協力できると思うよ。」と私。

「それで旦那は彼らの罪に十分に証拠があると思うのですか？」とブレット。

「君に嘘をつくことは親切なことではないので、」と私。

「君の息子たちがしたことは、すべて人前でおこなわれたことだ。多くの人々が目撃していたんだよ。」

「でも、もし十分確実な証拠がないなら、あなたが見たものを言わないことを約束してくれますか？」とメアリー。

「メアリー、落ち着いて」と私。

「誰も私がそこにいたことを知らないし、私はその時、その現場から百マイルぐらい離れて目撃していた。ただし君の息子たちが助かるだろうと甘く見てはいけない。君に甘い言葉を言うのは良くないでしょう。無罪を期待した場合、そうでなかったら君がいつそう悲嘆にくれるだろうからね。」

「あなたは今まで、とても私たちに親切だったので、厚かましくも、私はもう1つのお願いをしてもいいでしょうか。裁判で彼らのことを証言してほしいのです。」とメアリーは言った。

「メアリー、どうしてかい？あなたは私に何と言わせるの？もし、この事件がおきるまでは、彼らが正直で、静かで、勤勉な若者であった、それは真実だと私に言わせるのならば、それは恐ろしいことだ。」と答えた。

「つまりそれはこの犯罪に対する弁解ではないんだよ。そしてそのうえ、私は一昨日の晩まで君の息子たちに会ったことはなかったということを、私自身で述べることができなくなってしまうか

らね。」

「いいえ、私はあなたにそのようなことをお願いするつもりはないのです。でも私は、彼らがそんなひどいことをしたとは信じられないのです。息子たちは悪いことをしたとは思っていません。でもあなたが、そのようにおっしゃるのなら、おそらく彼らは放免されるでしょうね。」
(82頁)

「そうだね、メアリー。あなたがつらいと思うことは、私にとってもつらいことだ。しかし私はうそをつくことはできない。あなたはあなたの息子たちに悪気がなかったと言う。でもそれをどのように証明するのかい？」と私。

「工場で機械が使われるはずだと、とても強く考えたのです。」とブレット氏が答えた。

「多くの人たちが仕事を欲しているのに、だから職のない飢えている人々のために機械を壊すことによって正義をおこなおうとしたのです。」とブレット。

「そのことが法律を犯すことだということを知らなかったのですか？」

「彼らはわかっていました。でも法律の方が不公平なんだと思ったんです。だから私もそうしたのです。」

「君は法律の何が不公平だと考えるの？ すべてかい？」

「違います旦那。でも機械が準備されることに規制をせずに、それを取り壊したという理由で人々をやみくもに罰するということが、です。」

「よし。それで君は法律のそういう点に反対しているんだね。いろいろな特定法を考えてみ給え。銀行券は銀行家のみによって発行されるのであって、偽造を犯すためではないだろう。またダービーの人々が、紡績機が導入され大変な思いをすると考えればディーン氏 (Mr. Dean) が誰にも彼の新しい紡績機を作らせないように法規制させることだ。なぜなら彼はこの機械の特許権所有者だからね。そしてみんなはディーン氏の機械を破壊するのではなく、それに代わる機械を製造する仕事を始めるべきだ。私は紡績機械の製造は、この国の徒弟が7年ぐらい働けなくなるくらい難しいことだと思うね。そうこうしているうちに親方から徒弟たちはきっと逃げ出してしまうだろう。」

「考えてごらん。非国教徒が牧師はもっと豊かであるべきだといって司祭を襲って国教会の大聖堂を焼き討ちしたらどうかね。また、ロンドンの人たちは、皆国王は普通の人のようにパンのために働くべきではないと考えるかい？そしてそれに乗じて税金を支払わなかったら？そしてその結果国王の威厳が商取引されるようになったらどうする？君はこの国がそんな状態になると思うかい？」

「でもそれは、単なる空想でしょう？」とブレット。

「徒弟と不平分子が、機械に対する君たちの反対をばかばかしい趣味だと考えたらどうかね？誰がどうやって正しいことを決定するのかね。そしてどうやってそれを証明するのかね？」

「それはやっぱり常識で考えますね。だんな。裁判に聞くことはないですよ」(84頁)

「それは誰の常識かね？君がいいと思うことは誰かが悪いと思うし、そうなったら誰が問題を解決するのかい？まあ、それはさておき、私は君に手を貸すことにするよ。こうした時には、裁判官は公正でなくてはならず、その視野にすべての関係者たちの関心を持っていないとてならない、賢明さ、先見の明と知識を持っていないはずだ。その裁判は、立法をおこない、それを主張

する政府が行うはずだ。だからこの裁判は君が間違っていることを宣言するはずさ。」

「だが、政府が間違っているのかもしれないじゃないですか？」

「なあブレット君、考えてみてくれ、もっとも間違っただけなのは君なんだよ。政府は一人ではなく、数百人という人々から成り立っている。利害関係者もいれば抵抗する人もいる。そもそもその法律が間違っているという基準を考慮する人々から成り立っていないんだ。それに君や僕みたいな個人よりもはるかに知識や経験がある人々が統治の術を学び、国王との問題を解決し、そして法律の形成と維持管理に一貫した賢明さをもっている。君が反対する特定の案件だって、国王の議題や10分の9という多数決で政府に同意して法律を可決すればそれは正しいことになるのさ。君の判断が、こうしたたくさんの賢明な人々より素晴らしいことだと、信じることができるのかい？」(86頁)

「さあ。旦那。確かに私は愚かで、そしてうぬぼれが強かったかもしれないです。でももし私が出たとえ1つでも間違っていると思ったら、相手がどんなに賢明で多数の人々だとしても、正しいことだと認めることができません。私は何百という人々がこの問題について考えることを手助けすることができないけど、私が意見を変える理由を、自分で見つけられるまで正しいと思いつけなければならぬと思うのです。」

「確かに。ブレット君。私は君がそのわけが分かるまで、君の判断をやめることを期待したり、望んだりしやしないさ。私はただ君自身が法律を理解するその前に、君と政府がなぜそれほど考え方が違うのかわかるまで、待たなきゃいけないってことを示したいだけなんだ。もしそれでも、君の考えで法律を破るなら、その処罰について、君が不平を言う権利は持たないんだ。」

「じゃあ、旦那。私は法律が不公平であると考えていても、それに従わなければならないのでしょうか？」

「その通り。もし君が法の保護を望むなら。もし君が君の生活、君の自由と財産が法律によって守られることを望むなら、君はどうしたって法に従わなくてはならない。法への服従は、この国の安全の状態をしめすものだ。もし君が法律に従うなら、法は君を守るだろう。君がどのように法から逸脱するか、それに非常に注意深くなることは、疑いなく、君はすでにそれほど多くを法に負っているからなんだよ。」(87頁)

「ねえ旦那、我々はどんな風に法律のおかげをこうむっているのですかね？」

「すでにもうこうむっているじゃないか。もし法律がなかったら、君より腕っぶしの強い奴が君の目前で妻を殺したとしたら、あるいは君の子供たちを連れ去って奴隷にしたら、あるいは君の頭上で家に火をつけたとしたら、そんなふうになにかしら暴力を振るったとしたら、君はどうするのかい。」

「法がなければ私は従うでしょう。」

「もし、君が政府に助けてほしくて、『私は隣人の子どもは殺さないけれど、機械は壊します』と
いったら、政府はノーという権利を、機械を壊すと言った君の権利と同じように持っているんだ
よ。『それじゃあ、あなたの子もたちは守らないけれど、あなたの妻を守りましょう』と言っ
たろう。もし君がただ部分的な法への服従をするなら、政府はただ部分的な保護だけをするだ
ろう。しかし政府はそんな風な言い方はしないけどね。言ってしまうと、政府は君の隣人が
法への服従を守ってきたお返しに、彼らの財産を守ると約束したわけさ。だから政府は君
たちを国から追い出すか、事を起こすのを防ぐために、君を閉じ込めなくてはならないの
さ。これが正しくないって言えるかい?」と私。

「それがどういうことだかよくわかりませんが、旦那。ただ、法律はずっと前から、誰が
作ったかわからないけれど、世の中にはあるもので、私には、その法律が好みに合っ
ているかどうかなんて、けっして聞かれやしない。それで、もしそれに従わなければ、
私は罰せられるということは決まってるってことなんですね。」とブレット。

「しかし、君は法律がいいことをしてくれることを考えていない。君は機械を壊した
という理由で罰せられることばかり言うが、それと同じぐらい、機械から得られる報
酬についてよく考えていないじゃないか。君は法律がどんな風に作られるようになった
か、誰がそうしたか知らないと言ったね。よし、説明しよう。

他の国と同様にこの国でも、最初の人たちの社会は法律なしで生活する野蛮な社会
だった。人々が耕していたほんの小さい敷地は、自給自足の自分たちの食べ物、粗
雑な衣類と住み家だったけど、これを強い者から安全に守る手段がなかったんだ。
もし実力者が弱い男の妻を連れ去ったなら。もし若者が年をとった男の食べ物
を盗んだり、あるいは彼の住み家から彼を追い出したりしたらどうする? その
被害者たちは彼らと闘うために強いものと結びつくしかなかったんだ。だ
って財産、ひいては生命の保全だけでなく、絶え間ない論争、けんかが続い
ていたんだからね。君はこの生活様式をどう思うかね?」

「そりゃ、よくないに決まっていますよ、旦那」とブレット。

「そうだね。とても良くないよね。だから法律を作る必要があるとみんなが考
えて、法律をつくと、野蛮な状態はすぐに終わったんだ。争っていた人々は全
体の利益のために、同意したのさ。暴力を犯すすべての人が、残りの人
々に罰せられることになった。しばらくすると、人々はこういう人々を
処罰する権利に効果的な方法を見出したんだ。トラブルを処理した代わり
に、名誉が与えられる。それは完全に、公費で維持される組織さ。そう
この組織はどう見ても政府だね。このようにして司法は始まったんだよ。
それでいっそう文明が進歩すると、人々はもっと多くの財産を持つ
様になったのさ。人々はお互いにもっともっと依存し合い、さらに新
しい法律も必要とされるようになった。」

例えば、最初はすべての人々が、自分のためにすべてのことをした。彼は彼の小屋を自分で建て、彼は自分の食物を求めて狩りをした。そして彼は自分で仕留めたけもの革で衣類を作り、自分の武器、や仕掛けの道具類など、必要なものすべてを作った。でも、ついに、1人の男が彼がとても作れないような沢山の武器を作ることができたんだ。もちろんこの武器はその辺の人々はとても作れないようなすごいものだった。彼と食料の余剰がある隣人たちは、彼がほしがると、その武器を交換しようと申し入れるだろう。すると武器職人は自分の家の周辺よりも食料が手に入りやすいとわかって、それに多分この武器職人は、ここでは彼の周辺より多くの見返りが期待できるだろうと思って、ほしいものすべてと交換できるなら、かれらのすべてに武器を供給しようと申し出るだろう。それからこのような方法がどんどん一般的になるだろう。人々は一日中衣類の製作をするのをやめるだろうし、ほかの人は一日中小屋を建てるのをやめるだろう。そのようにして、彼らは、次々に起こる労働に対する、人々の対価が当然保証されるような新しい法律が必要になっていったんだ。

人々はその法律が気に入らなかつたら、ほかの場所へいかなければならないだろうし、少なくとも、その人が気に入らない法律なら、その保護あるいは利益を期待してはいけなと言われるだろう。だってすべての人が、たった一人の反対のために、利益を断念するべきであると思われなからね。君はそう思わないかい？」

「そのとおりです。旦那。そしてそれが、今の私の息子たちのケースなんですね。でも彼らがこうした理由を知らなかつたら大変ですね。」とブレット。

「あなたの息子たちが、何をやったか自分がやったことを理解してないのは政府の過失ではないでしょう。それはすべての人が知るべきことだからね。私はすべての人々が、どのように政府に依存しているか、それが社会で彼自身の安全と都合のよいことにどれくらい重要であるかについて、すべてを理解してるか否かにかかわらず、法律をしっかりチェックするべきだと思う。」と私。

「でも旦那、不正義な法や愚かな法はどうしたってつくられるでしょう。誰がそうしたことから社会を守るのですか？」とブレット。

「人々は、まず法をつくる賢い人を選ぶことに全力を挙げるべきなんだ。議会のメンバーに賛成投票をするすべての人が立法者を選出しているんだよ。もし誰かが愚か者か、あるいは適切でない人を議会に送ってしまったら、その愚か者や不適切な人間に法を決めるのに必要な権利をすべて与えてしまうことになるんだ。でも人々がもし有能な、そして正直な人を選挙で選ぶならば、その人は賢明な法を作って、それを維持するのに力を注ぐだろう。自分より懸命な人々がこれをしてこそ、法への服従というのはもたらされなければならないのだよ。そしてその人が先を予測することができることが法の支配にかかってくるんだ。何百という、そうした賢い人たちが、国の利益のために、それぞれの個人のために良いだろうと、機械が使われるべきであるということに同意した今、機械も同じように、すべての種類の私有財産が守られなくてはならないのと同じように守られなければならないのだよ。法にはこうした目的があることを知っているかい？」

それにさっきちょっと言ったけど、どんな意見があろうとも、法への服従はすべてのひとの義務なんだ。もし君が今まで言ったような法の保護を忘れたら、君は自分で結果をとらなくてはならな

いんだよ。愚かな人たちが刑罰を不正義だと言うようなね。」

ブレット氏は、私の答えを熟考し、私はほんの短い間、彼自身が考えるのを邪魔しないで、そしてそれから、再び話し出した。

「もし君が、息子たちが、今苦しんでいるような暴動という暴力行為に参加したのなら、君は結局のところ、逃げたに過ぎないのだよ。ブレット君。もし君が彼らと運命を共にしていたなら、もし君が犯罪の程度を知らなかったなら、私は哀れと思うべきであろうが、君の罰を不公平だというわけがない。今君は問題のさらに多くを理解しているね。そしてもし君が再び暴徒に合流するなら、本当に君の人生で最悪なものに値するだろう。」

「そのおそれはありません。旦那。私はまだ旦那ほどわかっているわけではないけれど、もし私が息子たちに教えることができたら、旦那の言ったことすべてを言うでしょう。そしておそらく、今みたいに彼らは刑務所に入っていなかったでしょう。もし女房が抱える赤ん坊が成長を遂げたなら、法律を恐れることを教えられるべきです。彼の兄弟に教えることは、もう遅いけれど。」とブレット。

「法律は彼らの道しるべでなければならないのだよ。」と私は答えた。

「君が今できるすべては、彼らの許しを請うて、そして君自身、苦情を言わずに法律の判決を素直に受け入れることだ。そして君が法に触れることに二度と再び関わらないように気をつけることだ。もしこれのほかに、君が犯罪と破壊から見当違いの隣人を保護するなら、私は君に刑が科されるはずだと確信するよ。」

『あなたがたは、すべて人の立てた制度に主のゆえに従いなさい。主権者の王に対してであろうと、あるいは悪を行う者を罰し善を行う者を賞するために、王から遣わされた総督に対してであろうと、これに従いなさい。あなた方が善を行うことによって愚かな者たちの無知を沈黙させることは、神のご意志だからです。自由人にふさわしく行動しなさい。しかしその自由を悪を行う口実として用いず神の僕としてふさわしく行動しなさい。すべての人を敬いなさい。兄弟を愛しなさい。神をおそれなさい。王を尊びなさい』(聖句：ペテロへの第一の手紙)』

私は彼らと別れて宿に戻った。そこで私は妻からの手紙を見つけた。それには次のようなことが書かれていた。

(妻からの手紙)

「子供たちはあなたを取り巻く苦難についてのあなたの手紙の記述に、心を動かされています。あの子たちの最初の衝動は、どんなに小さくてもいいから苦しんでいる人々に手を差し伸べたいというものでした。そうした傾向は、どのように犠牲は払われるべきかを子どもたちに委ねたわたしを気づけました。メアリーは、来週の自分の誕生日は、今年はするべきではないと申し入れてきま

した。彼女はプラムディングの夕食はブレット家の人たちや、あるいはもっと大きな苦悩にあるかもしれない誰かのために、パンとして与えられるべきだということです。

これは小さいメアリーにできるかぎりのことです。なぜなら彼女はお金を持っていませんからね。彼女の兄弟と姉妹はわずかな所持金をもってきました。そして私は私がおもうとしていた外套をなしで済ませることができると思います。子供たちからその話を聞いた使用人たちは、私にそれぞれ、あなたに自由に使ってもらえるように私たちが目標としていた5 ㄖの一部として、それぞれハーフクラウン（2.5 シリング= 30 ペンス）を持って来てくれました。」

この手紙はいろいろな点で私に喜びを与えた。私は私の小さいメアリーの行動に満足しており、彼女の犠牲に満足していた。それは多分、最高のもので、何よりも私にとって大きなものだと思う。私は子供たちの計画を実行するということと、次に、私が何を思ったかを書き、マンチェスターで、もっとも長い1日を滞在したことを書いた。

「貴方が私に割り当てた5ポンドを、私が考えることができる限り有用に用いるでしょう。それは私が見いだすことができた最も貧しい家族の一週間分の食糧、ジャガイモ、そしてスープとパンを、そしていくばくかの衣類として提供するでしょう。私が、もしできることなら、メアリーの誕生日に戻り、家についたその夜に、あなたたちみんなに、私がしたことをすべて話しましょう。そして私は貴方に、計画した方法がちゃんと実行されたと承認されることを希望します。

子供たちは、今回はおみやげを持って帰ることを期待しないでしょ。私はぜいたく品を持っている私たちの一方で、たくさんの必需品の欠乏で、命が危ぶまれる仲間がいることを知って、贅沢しようとおもわなくなりました。また私の子供たちもそうしないと思っています。」

暴徒たちの裁判は私が思ったより早く始まった。私はランカシャー巡回裁判の時に、再びマンチェスターを訪れた。そしてジョージとジョン・ブレットの予備審査がありそうな日があることを確かめ、その裁判を見にランカスターへ行こうと考えた。私はブレットと妻を訪ねて、彼らに私の考えを伝えた。さらに私は6足の手編み靴下が完全におさめられて、数週間前に代金が支払われていたことを確認した。

私が彼らの家に入ると、メアリーは一人で赤ちゃんと一緒にいた。彼女はもはや実際には生活困窮していないはずなのだが、その顔色は悪く、病人のようで、ひどく心配しているように見えた。彼女は私を見ると、ぱっと明るい表情になって、

「いらっしやい。あなたなら、気分がよい時でも悪い時でもいつでも大歓迎です。」といった。

「私は君の体調が4か月前よりもよくなっていると思ったんだが。もっと悪くなるはずがないからね。メアリー！」と私。

「私たちは、なんとか生活しています。私の夫は、このあたりで時々仕事を見つけることができました。でも景気はどんどん悪くなっています。夫が仕事の収入を得たときには、私は助かります

が、でもほんのわずかです。私は夫が悪い人々と一緒に危険なことをしていないのを知っています。それは私の最大の心配ごとでしたから。」とメアリー。(100)

「メアリー、今君に会うまで、ブレット君がもう悪い仲間たちと付き合わないかいつも心配だったよ。私はできる限りの説得をしたつもりだけだ。」と私。

「そうよ。あなたはそうしてくれました。それはもう、感謝に堪えません。」とメアリー。

私も夫が通りを歩いているときに、時々かつての悪い仲間が彼をまた暴動に誘うんじゃないかとおびえていました。でも彼はすぐに奴らが貧しい我々からさえも盗みを働くようなひどい人だとわかったのです。聞いてください。彼らは真っ昼間の通りで盗みを働くこともあるんですよ。私はきっと奴らは機織職人なんかじゃなくて、遠くからやって来たギャングだと信じてるんです。」とメアリー。

「メアリー、私もそう信じてるよ。私が家に戻ったあと、この町が穏やかになったことを新聞で読んで知ったよ。」と私。

「そうです。本当に静かになりましたよ。今はこれからの裁判について町の人々は思いめぐらしています。私ははやく裁判が終わってくれたらと思います。もう、私の息子たちがどうなるのかわかるまで心静かにしてられないのです。それが、今、とても自分の調子を悪くさせていることだとわかってます。」とメアリー。(101 頁)

「でも思うに、君は覚悟を決めているんじゃないのかね？」と私。

「でも、もし息子たちが絞首台に行くようなことになったらと思うと。」とメアリー。

「きっとそうならないよ。」と私はすぐに答え、「息子たちは罰からは逃れられないだろうけど、死刑ほどのものではないと思うよ、まあ、投獄か、追放ぐらいだろう。」と私は言った。(101)

「でももし、お金がないために嘆願の機会を失ったら！私たちには弁護士にお金を払う余裕がありません。法律もよく知らないので何を言うべきかもわからないでしょう。」

私が思いやりあるように見えるのを見て、彼女が涙を突然流し始めて、そして言った。「旦那さん。あなたは私たちにとても親切だったので、これ以上お願いするのは心苦しいのです。(102 頁)けれどももしあなたが弁護士に支払うお金を貸してくれるなら本当にうれしいのですが。もっと稼げる良い時が来るときに、私の夫はあなたにお返しします。そして息子たちが戻ってきたら私はあなたのために身を粉にして一生懸命働きます。どうかお願いします。私の人生は彼らのことにかかっています。こんな大事な時に息子たちに何もしてやれないこの私が、ここで座って彼らに何がしてやれるのかどうか一緒に考えてください。考えてもみてください。息子は暴動に加担して、それは犯罪ですけれど、強盗や人殺しはしていません。息子たちは自分がしたことについて、よくわかっていなかったのです。私は息子たちがそれがわかればすぐに過ちを認めて後悔するだろうと確信しています。そしてそれから息子たちは立ち直って、再び私たちの慰めと誇りの存在になってくれるかもしれません。もしも、あなたが助けてくださるのなら…。」とメアリーは訴えた。

「わかったよ。メアリー。息子たちは弁護士がいないことで苦しむべきじゃない。今晚私はラン

カスターに移動しよう。そして弁護士の手配をしよう。」と私は言った。

「あなたに神のご加護を！ 神よこのような方を私たちの家に連れてきてくださって感謝します。私はかなり多くの費用が掛かること知っています。でも一生懸命働いて、必ずお返しします。」とメアリー。

「そのことは後で考えよう。費用が一体いくらかかるかわからないからね。今日はそのことは考えないで。でも私はこのランカスターでやるべき仕事をするために時間を無駄にはできない。今晚法廷から出てくる弁護士をつかまえなくっちゃならないからね。」と私。

「今晚ですか？ 息子たちの裁判はいつですか？」

「おそらく明日だろうね。でも確証はない。そのことを知っていたかね？」

「いいえ。私は数日内にはあると思いましたが、そんなに早くはないはずだと思っていました。でも早くてよかったです。なぜなら、行くことを心に決めていた私の夫はそんなに早くは行けないでしょうから。私はそのことが大いに彼を悲嘆させることを心配していますし、それは彼にとっては良いことではないでしょう。彼は今、裁判に行くことを考えるべきではありません。だから私は早く始まってよかったと思ったのです。でも知らせを聞くまで、私たちは、明日はどうしたらいいのかわかりません。」とメアリー。(104頁)

「私はできるだけ早くニュースを知らせよう。でもいつになるか予想がつかないけれど」と私は言った。

私はすぐにランカスターに出かけた。そして法廷が解散する直前に到着した。私は再び暴徒の裁判が確かに明日の朝にあるということを知らされた。私は、次の日の裁判にかけられるはずの、貧困のために弁護士を手配できなかった2人の暴動犯のために来たことを述べた。そしてこの巡回裁判に参加している最も有名な弁護士D氏を見つけることにそれほど時間を取られなかった。D氏は私が言うことを途中でさえぎり、彼はいかなる報酬もなしで、暴徒を嘆願しようと申し出ていると言った。ブレット兄弟は幾人かの友人が嘆願を申し出ていた。彼は直ちに若者たちの裁判の準備に取り掛かり、食事が終わるとすぐに彼らのところへ行って会うことを申し入れた。彼は弁護士として容易に許可を取り、私が同行を依頼すると快く約束してくれた。私はこの紳士の温情に大いに喜び、特にブレット兄弟が友人の深い思いやりを受け、証言の不足のために、道を失っていなかったことを喜んだ。貧しい若者たちは申し出た人々の親切に対して感謝に満ちていた。

D氏は彼らの案件に関して話をし、そして彼らに罪の緩和以外にどうしようという目的も持っていないことを警告した。彼らは明らかに死刑宣告を恐れており、自分の犯した暴力を心から後悔していた。

しかしながら、法律の観点からの現実的な罪悪感を確信させることや、彼らがどんな処罰に値することを認めさせることは簡単なことだった。彼らは逃げたかどうかにかかわらず無罪の宣言をした。これは彼らの法律に対する最後の違反だった。(106頁) D氏は誰かに目撃されたかどうか尋ねた。

「あなたはどうですか？」と振り返ってD氏は私に尋ねた。

「私は暴動の夜まで一度も彼らを見たことがなかったと答え、だから彼らのそれまでの性格などは噂で聞く以外は知らない。」と述べた。

若者は彼らのそれまでの性格はただマンチェスターの知人にしかわからないと言った。でも彼らのマンチェスターの知人を呼び寄せることは今となっては遅すぎた。

D氏はマンチェスターからたくさんの方が来ていることを思い出した。彼はノートを取り出して、名前を読み上げ、3人を知っていて、喜んで証言してくれそうな知人を挙げた。私は彼らにすぐここを出て証言してくれると思われる人のところに行くことを約束した。これが彼らの罪の軽減を可能にする唯一の証言であるように思われた。

D氏は、ジョン・ブレットが襲撃のかどで裁判にかけられるであろうと言った。彼のやったこと以上に暴動に従事していたことを示す証拠はないと思われる。しかしジョージはジョンが彼を救助しようとして危険に加わったという。これは大きな悲しみだという。ジョンは誰が彼をマークしていたか知らなかったが、また彼に対する記録があったとしても、積極的に暴徒に加わったわけではないとジョージは宣言した。彼の父親の、そして母の記述で、容易に罪は軽減されるべきだろう。しかし彼は兄と同じことをしたわけだからもし彼の罰がそれほど厳しくなかったとするなら、それは幸運だろう。

兄弟は我々の訪問によって、また彼らをよく知る友人がいたということは彼らを元気づけた。しかし彼らが監禁される様子を見たのは悲しかった。彼らの行動力や精神はまったく機能しなくなっていた。彼らは精神的に弱く、彼らの愚かなふるまいに対しては、彼ら自身に責任を感じていた。私は彼らの心配でやつれた顔の表情を忘れることができず、その場を去ってから一晩じゅう彼らの姿を忘れることができなかった。(108頁)

兄弟の良い性格の証言を確保することに困難はなかった。彼らの3人の知人たちは、失業する前までは、彼らが正直で、勤勉で、静かな若者だったとして、兄弟について話し、法廷で証言してくれることを約束した。その夜私はほとんど眠らなかった。早く法廷に行かないと場所を確保できるか心配だったのでとても早く出発した。私は法廷に入る許可を得る群衆の中において、押されることに辟易としていた。ものすごい人が殺到したが、私は良い場所を確保することができた。そこは法廷のすべてを見渡せ、群衆から押されることのない場所だった。ブレット兄弟の裁判の前に、もう一人の裁判があったが、それはすぐに終わるはずだった。そして実際に早く終わった。私は弁護士の訴訟手続きや、聴衆の様子にはほとんど興味を持たず、近づく次の裁判に注意を集中させていた。私は法廷のもっとも後ろのコーナーによく知っている顔があるのに気づき、視線を停止させた。最初見間違いかと思ったその顔は、間違っていないという確信に変わった。ブレット氏は息子たちの裁判を見るために本当に来ていたのだった。(110頁) 私は彼がどのようにしてここまで来たのかわからなかったが、間違いなく彼はここにいた。彼は疲れているように見え、そして粗末な身なりをしていた。私は何の恐れも心配もなかったので彼と場所を変わりたいと思った。しかし混雑していてこの場所から彼のところまで行くことはできなかった。それに彼の場所の方が法廷の外に出やすいのではないかと思った。彼は私に気づいてはいないようだった。そして、私は彼の感情

を傷つけることなしに、彼の顔の表情と態度を見るのが容易にできた。

ジョージ・ブレットは同じ犯罪に関して有罪であった5人の他の男と一緒に裁かれた。

5人のうちの3人は良くない仲間に取り込まれた単純な、無知な若者であるように思われた。他の2人は下劣な、そして自暴自棄な男性たちのように見えた。血の気の多い若者に対する証言はほとんどなかった。彼らはすべて「無罪」を主張した。

そしてジョージが彼の申し立てを求められたとき、かわいそうな父は彼のハンカチで眉や顔をぬぐっていた。裁判や囚人についての私の知識からすれば、それはもっとも興味深いものだった。それは私が時々、裁判に出席するときに、感じたどうなるかの不安な感じを少しも引き起こさなかった。私が時々、刑事裁判に出席するとき、有罪がはっきりしないところと証拠が矛盾しているのをしばしば感じたことがあった。しかし、今回の場合、証拠は明確で、完全にあって、否定することができないものだった。数人の証人が別々に告訴された暴力行為の個人情報証言した。かわいそうなジョージは窓に突進して窓枠を壊そうとしたことを証明され、その否定は試みられなかった。彼の唯一の証人は、事前に依頼した三人の人物だけだった。けれどもこれらは明らかに好ましい印象を裁判に与えた。被告側の、D氏はというと、彼は、ジョージの青年期からの良い性格とおこない、彼の生活困窮と犯罪について、彼が現在懺悔していることなど、法廷において深い思いやりを持ってほしいと、感情をこめてそれでもなお穏やかに、かわいそうなジョージの温情的な判決をしきりに促した。(112頁) それでも陪審は評決についてためらうことができなかった。評議員らはすべての囚人を「有罪」と判決した。

私はこの恐ろしい言葉を聞いてかわいそうなブレットがどうしたか気になり、彼をむなしい思いで見た。彼は前の場所にいなかった。私は彼がすでに法廷を去ったのだと思った。ジョージは謙虚な落ち着きで評決を聞いていた。囚人たちが、この判決が宣告されるべきではない理由を促す嘆願を持っているかどうか尋ねられたとき、ジョージが答えた。

「どうかお願いします。裁判長。たった一つだけ言わせてください。他の人への警告としても。私は法律について偽り、我々を欺く悪い人々によって誤った方向に導かれてきました。私はそのことは、自分が悪かったとしか言いません。特に私は同時にこの問題に引きずり込んでしまった弟がいるからです。そして我々兄弟の間には、とても貧しい両親がいて、僕たちが慰めてあげることを最も望んでいるのに、両親の心をひどく悲しませてしまいました。もし、父や母へこの私のやった悲しみのために、裁判長、あなたのご慈悲をいただけたら、私はまじめになって、もう法律を破らないこと、そして他の人たちが破壊行為をするのをやめさせるためにできるかぎりのことをすることを約束します。これが今、私が言わなければならないすべてです。」

もし裁判官の顔の表情によって推測するなら、ジョージ自身の有罪の承認は彼の評価に害を及ぼさなかったはずだった。裁判長は立ち上がって、法律に基づけば、彼らにはすべてに死刑が記録されるはずだ。だが、彼らのケースは、多分この死刑の処罰を変更することを良しと考える国王の寛

大な解釈が受けられる可能性があると言った。けれども裁判官は彼らには死刑判決のために準備するように助言した。ただし彼らの命が助けられる場合に備えて、しばらくたってから、再び社会に入り、有罪を宣告された彼らが社会と家族に与えた罪を償うように注意深く生活するべきであることも助言した。ジョージは頭を低くしてこの言葉を聞いていた。そして巡回裁判が終了するまでにその判決が無効にならないことを聞いてはっとしているかのように見えた。囚人たちはそれから法廷から解放された。

D氏は、ジョージの罰が2、3年の投獄である可能性が高いと言って、親切に私に記録を渡してくれたので、私がおそらく裁判の間じゅう不安だったのではないかと言った。また弟のジョン・ブレットの裁判は、彼がただ彼の兄を取り押さえていた軍人に対する襲撃で告訴されただけであったこと以外、だいたい彼の兄の裁判に似ていた。兄と同様に証拠は明確で、完全だった。そして同様に彼の性格に対する三人の証言の影響は大きかった。そして彼は6カ月の投獄のみを宣告された。

裁判が終わるとすぐに、今聞いた息子たちの運命のすべてを、不安に駆られている不幸な父親に聞かせてあげたくて、群衆に身体を押し込んで移動しようと努力した。けれども私は動くことができなかった。さらに裁判は続いており、もっと多くの暴徒が次々裁かれようとしていた。途中で退席しようとする人間は、おそらく私ぐらいしかいなかっただろう。とにかく法廷が解散するまで、私は席を離れることができなかった。旅館への帰り道、どうやってブレット氏を見つけだすべきか考えながら、ゆっくりと歩いていった。しかし私が旅館に着いたとき、ブレット氏が私と話をしようとしているのを見つけた。

「旦那、あなたはここで私に会うとは思ってなかったのではないですか？」とブレット。

「ああ。驚いたね。」と私。「今朝、法廷で君に会っていなかったとすると君はここまでどうやって来たのか？君は裁判が今日だと、昨日の朝には、知らなかったはずだけど。」と私はいった。

「私は昨日の4時に家を出て、ずっと歩いて、そのあと数マイルほどは荷物運搬車に乗せてもらいました。旦那、とにかく私は息子たちの裁判が終わったかどうかを知りたいのです。最後までいられなくて誰も判決について教えてくれませんか。」とブレット。

「二人の裁判は終わったんだ。」と私。「そしてジョンがたった6カ月の投獄で放免になったよ。」と、答えた。「そしてジョージなんだが…。ジョージの罰はおそらく2、3年の投獄だろう。」と答えた。

「旦那、それはまだ決まってないのですか？」とブレット。

私は彼にいろいろな問題を説明した。だがまさに死刑のことを述べたときに、彼は青ざめて倒れそうになった。私は彼を旅館に連れていき、さらに彼がポケットに入れた家から持ってきているひとかけらのパン以外、マンチェスターを出てから食べていないのに気づいた。私は彼のための夕食を注文して、彼がそれを食べて元気をつけていたとき、後で私の部屋に来ることを望んだ。そこで私は彼が望んだすべての情報を与えるからと言って。

我々が共に食事をしていたとき、私は彼に裁判の完全な記録を渡した。それから我々は今晚彼ら

が収監されている城に入る許可を得ようと努力し始めた。ブレット氏は彼の帰宅の前に息子たちに会いたいにちがいない。私が前夜に監獄を訪れたときは、それほど入ることに困難はなかった。

彼らは別々の独房に入れられていた。そして我々は最初にジョージの房に案内された。

我々がドアの前に立った時、私は父親と息子だけで会いたいだろうと思って外で待っていた。しかしブレット氏は私にも同行して息子に会うことを懇願した。あわれなジョージは我々が房に入ったとき、テーブルに突っ伏して、彼の顔を隠していた。そして、私が彼に話かけるまで彼は顔を上げなかった。彼は我々に背中を向けて、壁に向かって寄りかかって、声を出してすすり泣いた。(118頁)「ジョージ、私の息子よ」父が言い、「なぜ後ろを向くのかい。とうさんに話をするなら内気にならないでくれ?」と言った。

「私の近くに来ないで、父さん、親切に僕に話をしないで。僕は父さんの気持ちを踏みにじったんだから。」とジョージ。

「それは違うよジョージ。考えてみてくれ。父さんだってジョージと同じだ。二人とも物事をもう少し思慮深く考えることができたならよかったんだが、思慮に欠けていたんだよ。でも君は罰を受けた、そして私は罰を逃れたんだよ。君は父である私よりましなことをしたんだよ。だから君が望んでもジョージ、父さんは君を責めることができないんだ。でも、許されるなら君の罪を支えたい。私がいることはむしろ母さんのために良かったかもしれない。」とブレット。

「母さん!」ジョージが言った。

「母さんは大好きだ。僕は母さんをなんと誇りに思っていることだろう!今、はずかしめられて、刑務所に入れられて一番大事な時期を浪費している僕を見て…。僕は母さんのために働くべきなんだ。」

「その気持ちは、彼女の慰めでもあるんだよ。ジョージ」と私は言った。

「君が今の不名誉を拭い去ることができるかもしれないということを実感してほしい。

君が窃盗を犯したならば、懺悔と自己改革にもかかわらず、恥は生涯ずっと後を追うかもしれない。でも君のケースはとても異なるんだよ。君が刑務所を出るとき、もしまじめで、静かで、そして、勤勉なら、あらゆる人は君が愚かさで無知で罪を犯してしまったと思うことだろう。そして今まで通り君の人格を認めてくれると思うよ」と私。

「えっ、僕が刑務所から出て行くとき!旦那、それはいつなんですか?」とジョージ。

「2年か3年ぐらいだと思うが。君のご両親には本当に長い期間だが、君はその時にあっても、まだ彼らにとっての慰めでありつづけ、君が引き起こしたすべてのトラブルのために、君が両親に弁償することを希望しているよ。」と私。

「ああ神よ、そうなりますように!」とジョージが叫んだ。

「きっとそうなるだろう。」と私は言った。

「だが、君は、自分自身で細心の注意を払わなければいけないよ。なぜなら刑務所内では君を墮落させた仲間たちと接しなければならないからね。彼らは君よりも悪い犯罪で放り込まれているから、悪い手本と悪い人たちの会話に接する君の危険は相当大きいからね。注意深くしなければいけないよ。」と私。

「ああ、息子よ。くれぐれも気をつけなさい。今おまえが入った刑務所より状態の悪い刑務所から出てくるのを見るような悲しみをさせないでおくれ。」とブレットが叫んだ。

「父さん、僕はそんなことはしません。約束します。僕は十分に苦しんだ。僕はあなたをこれ以上深く悲しませることはしません。そしてジョンにあなたたちの近くにいてほしいと思っています。」とジョージは言った。

「ジョンの危険は君より少ないだろう。」と私。「彼はたった6カ月の収監だからね。数カ月間なら誘惑に抵抗することは君より簡単だろう。けれども3年は長いからね。私は、最も必要な時、君のお母さんが君に与えた良い教育を思い出すことを期待するよ。」と言った。

「ジョージ、お前の母さんは愛情を精一杯お前にかけてんだよ。母さんはお前に自分のことは思い悩まないよう言うだろう。再びお前に会うまで、母さんは根気よくお前を待とうとするだろう。そしてもし、それに君が値するようになったら、今までと同じように幸せを感じるかもしれない。」とブレットは言った。

私が親子の間の会話に入り込んでいることに申し訳なさを感じて、私はブレット氏に私が弟のジョンのところに行き、面会の準備をさせようと言った。私はしばらくジョンと一緒にいた。ついに我々に許された時間が半分以上経過したことがわかって、私はブレット氏を迎えに行った。彼は独房の入り口でジョージとつらい別れをしていた。それを見て私は少し後ずさりしたが、彼らの別れの苦しみまでは正直、私は共有しなかった。

現実の問題として、「今、私は何を望んだらいいのだろうか。」と思いめぐらした。

暴徒の悪いリーダーに悪い道に導かれ、不法な暴力を働いた結果を学ぶことができた貧しい人物たちを見た。

私は発明と産業の産物が破壊されるのを見た。

私は裕福だった人たちが貧困にまで落とされ、貧しい人たちが飢餓に陥るのを見た。

私は恐怖と不信が幸福で楽しそうにみえる国家の人々に広がっていくのを見た。

若者の心は悲しみに悩まされた老人の心をねじ曲げ、そして打ち砕いた。

私は息子が刑務所で人生の一番大切な時期を浪費することを眺めるようにしいられた親の苦しみをを見た！

貧困や暴力とは何だろうか。何が荒廃したのだろうか。深い悲しみとはどのようなものか。後悔とはどういうことか。そして、私はここで何を凝視したのだろうか。

そう、その答えは暴動の結果なのである。

(終わり / 122 頁)

3. 終わりに

本稿はハリエット・マーティノウ（1802-1876）の *Rioters or A Tale of Bad Time*（1827）の全訳の後半部分（67頁～122頁）である。本作品は、当時経済学者たちが議論をしていた機械論を前半部分に取り入れた機械打ちこわし暴動をテーマとするマーティノウの初期の作品である。『自伝』によれば無名だったマーティノウはこの時期8ペニー小説と呼ばれる大衆向け小説をホールストン社からの依頼で書きつづけていたが、この *Rioters* は大ヒットし、次の *Turn Out* のヒットと合わせるとその成功は「傾きかけていたホールストン社」を再生させるほどだったという。ヴィクトリア時代になると「ファクトリー・ノベル」のジャンルが文学や演劇に生まれるが、その潮流のきっかけとなった作品の一つであろうと考える。マーティノウはこの成功をバネに1833年から34年までの『例解・経済学』シリーズを書いて大成功を収める。そして1834年のマーティノウは、当時の経済学界の重鎮であったジェームズ・ミルと会う。その時彼女は、ミルが『例解・経済学』の企画時にその出版に対して否定的な意見を述べたことを撤回させるほどの国民的スターとなっていた。『自伝』によれば彼女がこの作品を書いたのちにマーセット夫人の『経済学会話』を読んで経済学を知ることになったと記述される。これがマーティノウ研究においては『例解・経済学』の動機となっているというのが定説であるが、マーティノウは自分の追究するテーマが実は社会科学だったこと、まさに経済学が解決しようとしている問題と同じだったことをその時点で確認したのではないだろうか。そうした点で彼女の追求する大目標をストレートに表現している初期作品 *Rioters* はマーティノウ研究には欠かせないと考えてこの全訳をおこなった。

前半と後半に分離した理由は、実はその分量の問題だけではない。この作品には二つのテーマがあると考えたからである。前半は当時の経済学者が理論的な解明を急いでいた機械の導入と失業の問題であり、後半は社会制度と法の順守の問題である。つまり、前半が経済学であり、後半が政治の問題を扱っている。したがって本稿で重要なことは、マーティノウがソサエティの成立と法の確立、政府の役割を歴史的に説明したのち、そのようにして成立した今の社会制度の中で、あらためて、当時の議論の中心である「労働者の正義」の問題をどう扱ったかというものである。マーティノウは労働者の権利の象徴としての「暴動」を例証して、それをどのように考えるかと読者に訴えているのが本作品の後半のテーマである。注意深く読まないと、あたかもマーティノウが法の順守ばかり訴える保守的な立場であるように感じてしまう。しかし彼女は巧みにそうした社会のありがちな傾向を肯定しつつ、労働者ブレットの言葉を使ってその矛盾を突いていくのである。たとえば、法がどのようにして成立したのかを「私」がブレットに説明した後、ブレットは自分が知っているのは、法制度の中で労働者は順守を強いられるが、自分たちはその法制度の成立や改正とは関係ない立場におかれていると述べさせている。人々の合意によって、その保護のために合法的に法は成立していることを「私」が高々と主張する一方で、「法が間違ってもあるじゃないか」とブレットに言わせ、選挙権のない労働者たちが、唯一正義を主張するための方法として「暴動」を肯定するブレットと、暴力で解決することは絶対にいけないと主張する「私」を議論対決させている。「私」とブレットは、この時対等な関係となっており、両者はマーティノウが意図する資本家

と労働者像を表現している。両者には深い友情と共通の目標が置かれているのが特徴であり、この関係はこの作品後に書かれた『例解・経済学』における工場問題を扱ったストーリーに共通する。内容について、前半はマンチェスターの町を舞台に、後半はランカスターの巡回裁判を中心にストーリーが展開する。巡回裁判とはイギリスでは12世紀ごろから始まる民事、刑事事件の出張裁判制度であるが、マーティノウがこの小説を書いた1827年にはマンチェスターやリバプールなどの産業都市の犯罪者はランカスターの巡回裁判所に送られた。巡回裁判所はランカスターにあるランカスター城の中におかれている。囚われの身のブレット家の息子二人を父親に会わせたいと考えた「私」が裁判終了後に城に入る計画をする部分がでてくるが、記述には特にランカスター城についての説明がない。しかしこの城の説明がないということが、それをよく知るこの時代の人々にこの作品が与えるリアルな印象を示している。ランカスター巡回裁判所は絞首刑の判決を多数出し、公開絞首刑もおこなわれた場所として有名だが、ランカスターというキーワードは息子たちが絞首刑になるのを恐れるブレット夫妻の心理を象徴するものとして意識的に描かれていると思われる。

『暴徒』後半のテーマは法の順守であることは述べたが、マーティノウは何度も主人公「私」に法を守る合理性を主張させる。メアリーの父に対して、ブレットに対してしばしば法の順守の重要性と、それを軽んじる若者たちの傾向に対する警告はこの作品の後半でくどいほど述べられている。その背景には社会的なモラルや常識はその社会の成立にかかわるものであり、その社会に特有なものであるという考え方があり。そして法や制度とは、そのときの社会構成員の合意で作られるのだからその社会の利益になるものであるという考え方があり。しかしそうであるからこそ、正義とは何かという問が生じる。マーティノウは「正義のための暴動」を主張するブレットに対して、正義とは何かを追求する。誰が決めるのかと問い詰めると、ブレットは法による判決ではなく「常識」で決まるという。マーティノウはまさにブレットが言った「常識」が法を形成していることを長々と社会契約説から議会制民主主義の歴史を述べて説明し、もしそれに抵抗するのならば、その恩恵は受けられない。ただしほかの社会の構成員になる自由はあると「私」に言わせるのである。この考え方はマーティノウの経済思想と大きく関係する。つまり市場経済においては経済法則が絶対に作用するという考え方である。その点で「必然論的」とJ.S.ミルがマーティノウの『例解・経済学』の書評で述べた言葉が的を射ていると思われる。

この作品はマーティノウが労働運動に影響を与えたいいくつかの事件を背景に描いていることが理解できる。一つは19世紀初頭のラッドライト運動である。機械の導入に手工業者が起こした反対運動である。当初は単なる暴動であったものが徐々に労働者の失業問題や賃金の改善などを訴える運動に変化し、その一部はチャーチスト運動へと向かう。後半に関係するのは、マンチェスターのセント・ピーターズ・フィールドでおきたピータールーの虐殺(1819)という衝撃的な事件である。この事件が起きてから、その時「暴動」ではなく、「集会」をおこなっていただけの群衆に軍隊が攻撃し、妊婦を含む女性たちや子供たちが殺されたことがマンチェスターの新聞や雑誌で全国に向けて発信された。マーティノウの描くブレット一家は、この時集会に来ていたまじめな労働者像が使用されていると思われる。そして女性や子どもの行進が軍隊に散らされる場面が、パーティーをしていた工場主の家の息子の言葉で述べられている。「いつもと違う暴動」と作品中で表現された

ものは、マーティノウがまさにセント・ピーターズ・フィールドの集会をイメージして書いていると考える。暴力による解決を否定し、貧しいなりにきちんとした身なりをした労働者階級が、集会や行進をおこなっている最中に騎馬兵が虐殺をおこなったこの事件は、まだ10代だったマーティノウの労働者像の形成に貢献したのではないだろうか。このような点で *the Rioters* はマーティノウが社会科学への扉をひらいた作品であり、そのストレートでわかりやすい内容はこれ以後のマーティノウ作品に大きなヒントを与えてくれるのである。

参考文献

- Martineau H, 1827. *Rioters; or A Tale of Bad Times*. 1827. Wellington, Salop: London: Printed by and for Houlston and Son.
- , Edited. Chapman, M. [1877]. 2010. *Harriet Martineau's Autobiography*. vol.1.2.3. edited by Maria W. Chapman: New York: Cambridge University Press.